

対人援助とは何か
鈴木大拙の思想に学ぶ

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

人との関わりの中から、また自分との関わりの中から、対人援助職者は、さまざまな問題にぶつかり、日常業務の中でとかく物事に固執した見方になりがちである。それは対人援助における問題解決や目標達成に障害となることがある。この物事に固執した見方を変える新たな見方はあるのだろうか。

本論文では、対人援助職者の立場から、物事に固執しない見方、つまり、対人援助に必要な新たな視点について考察する。

この物事に固執しない見方を、まずコーチング、森田療法、内観の視点から、それぞれ考察した。これらの視点に通底するものとして東洋的な見方があることが見出せた。

そこで、その東洋的な見方を、東洋人であり、なおかつアメリカにわたり、西洋的な見方とふれる機会があった鈴木大拙の思想から紐解いた。東洋的な見方とは、物事を分けて捉える西洋的な見方とは異なって、物事を分けて捉える前の奥のところから物事を見る見方である。この東洋的な見方こそが、物事に固執することなく見ることができる見方である。

この物事に固執しない見方、つまり柔軟な見方をするためには、まず自らの固定概念や物事の見方の枠組みに気づくことが大切である。そして、こだわった見方を超えて、物事を分ける前のところにある見方、つまり東洋的な見方に出会うことで、自分をしっかりと見つめつつ、被援助者に対して援助していくことができることが明らかになった。この視点が対人援助職者にとって必要な新たな視点である。この新たな視点を持つことによって、対人援助における問題解決や目標達成が順調に運ぶのである。

大拙が東洋的な見方でそれぞれの国家、民族がそれぞれの個性を保ちながら互いに尊重しあって共に栄えていくことを目指したように、我々、対人援助職者はこの新たな視点で一人一人の個性を大切にしながら互いに尊重しあって共に栄えていくことを目指していきたい。